文化庁月報

No.422
2003年11月号

CONTENTS

文化人の本音　河合隼雄文化庁長官対談　第20回　ゲスト 蜷川幸雄さん●演出家
海外の人に、次代の人に……4
長官コラム　文化庁の抜穴……9

特集　文化的景観の保護
寄稿
「文化的景観」の考え方と保存の意義……金田章裕・10
文化的景観の価値と保護……中越信和・12
文化的景観としての棚田の保全……中島峰広・14
解説
農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究（報告概要）……文化財部記念物課・16

連載
わがまちの文化振興条例⑧
熊本県文化振興基本条例……22
いきいきミュージアム　美術館・博物館事業レポート⑳
大原美術館（岡山県）……24
著作権の保護とその例外⑧……25
子どもたちから見た伝統的建造物群保存地区
高岡市山町筋（富山県高岡市）……26
全国発掘調査ホット情報⑧
史跡ピリカ遺跡の調査と保存（北海道）……27
文化体験プログラム支援事業⑧
福岡県杷木町……28
外来語の現状とその解決のために⑦
言い換えから除外するのはどういう言葉ですか…甲斐睦朗・29
探訪　日本の世界遺産⑧
世界文化遺産　原爆ドーム（広島県）……30
国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法―文化財鑑賞の手引き―⑧
銅鐸に描かれた絵（弥生時代）……31
日本の伝統美と技を守る人々　選定保存技術保持者編32
大西安夫（檜皮葺・柿葺）……32

文化庁ニュース
平成16年度文化庁映画関係支援事業の募集について……33
平成15年秋の叙勲、褒章受章者が決定……34
第50回日本伝統工芸展……36
平成15年度文化庁舞台芸術創作奨励賞作品募集……38

イベント案内
東京国立博物館
特別展　国宝　大徳寺聚光院の襖絵……40
東京国立近代美術館 フィルムセンター
小津安二郎生誕100年記念　小津安二郎の藝術……41
京都国立近代美術館
デカダンから光明へ　異端画家 秦テルヲの軌跡……42
国立国際美術館
企画展　川崎清 美術館建築とその周辺……43
東京文化財研究所
第34回 東京文化財研究所 芸能部　公開学術講座……44

新国立劇場スポットライト……45
12月の国立劇場……46
芸術文化振興基金ニュース……47

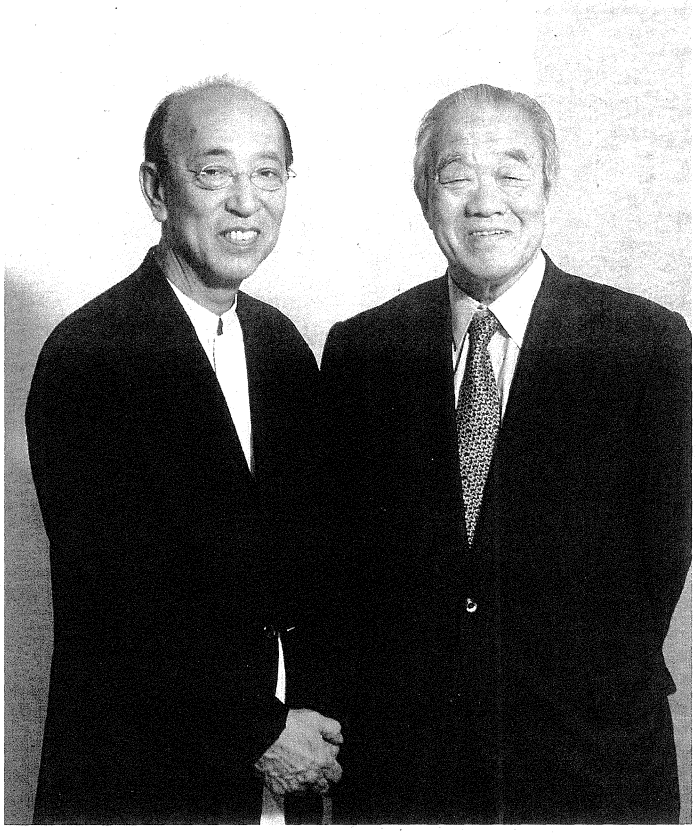
今月の表紙
【上】十三湖の景観（青森県市浦村ほか）
【左下】北山杉の風景（京都府京都市）
【右下】水ヶ浦の段々畑（愛媛県宇和島市）

題字デザイン　桑山弥三郎

文化人の本音

河合隼雄文化庁長官対談 第二〇回●ゲスト 蜷川幸雄さん●演出家

海外の人に、次代の人に



撮影／島峰 譲

海外は自分を問い直す場

河合 いちばん最近見せていただいたのは『ペリクリーズ』なんですが、あれはロンドンへも行かれましたか。

蜷川 そうです。ナショナルシアターで。

河合 どうでした、向こうの反響は？

蜷川 自分で言うのもなんなんですが、とてもよかったです。奇想天外な話で、日本的な芝居の手法をたくさん使ってるんで。

河合 そうですね。歌舞伎の手法を使われまして。

蜷川 あれほど荒唐無稽だと、普通の新劇をやるような方法ではとてもできないなと思って。日本の古典芸能の力というのはずいぶん我々にとってはありがたいと思いました。

河合 今までいろんな海外公演をやっておられますけど、特に海外公演ということで意識していることはありますか。

蜷川 ほとんどないですね。というのは、日本のお客さんに外国の芝居をわかりやすく見ていただくには、日本人の記憶にいちばん深く突き刺さるものがいいなと思って、仏壇の中で『マクベス』をやるとか、石庭の上で『夏の夜の夢』をやってたもんですから。それをそのまま外国へもっていくと、日本的と思われるんですが、初めから外国向けにそういうふうにつくってたわけじゃないんで。それがかえってよかったのかなと思ってるんです。

にながわ・ゆきお　演出家・桐朋学園短期大学部学長。埼玉県出身。昭和44年『真情あふるる軽薄さ』で演出家デビュー。『近松心中物語』『NINAGAWAマクベス』など代表作多数。『王女メディア』等海外公演も多く、平成11年には英国ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーで外国人として初めて『リア王』を演出。12年10本のギリシャ劇をまとめた大作『グリークス』を演出。15年映画『青の炎』でメガホンをとる。昭和53年度菊田一夫演劇賞など受賞歴多数。平成13年紫綬褒章受賞。

河合 なるほどね。『オイディプス王』も見せていただいたんですけども、あれも感激しました。あれは来年……。

蜷川 アテネオリンピックの併催イベントとして、二〇〇四年の七月一～三日にアテネ公演を行います。

河合 あれは東儀秀樹さんの音楽を使われたのが、すごくうまくいったように思いましたけど。

蜷川 あそこでちょっと舞うシーンがあるんですが、アテネ版は東儀さんご自身が出演なさるんです。

河合 ああ、そうですか。東儀さんの音楽は、向こうの人が喜ぶんじゃないですかね。『オイディプス王』で東儀さんを使おうというのはパッとひらめくんですか。

蜷川 前からあの方が舞う姿をテレビで見てよかったもんですから、東儀さんをくどいたら「やる」とおっしゃって。毎日稽古場にいらして、振り付けのところも「東儀さん、ちょっと踊ってくれないか」と言うと、ジーンズで舞うわけですね。それがもうなんともいえず、いいんですよ。ほんとに現代と古代がいっしょになったようで、それはすてきなもんだったんです。「ギリシャも行こう」と言ったら、「行く行く」と。

河合 僕もぜひ見に行きたいな。

ところで蜷川さんは、もともと演出家になろうとされたわけじゃなかったですね。

蜷川 俳優の出来損ないで。ですから、あまりアベレージの高くない野球の選手が監督になったみたいなもんで。

河合 そのほうがええんですよ。アベレージ高いけど、監督としては大したことない人がたくさんおられますから。

蜷川 唯一いいのは、大したことない俳優は、下からいろんなものを見てるんで、構造がよく見えるんですね。それから末端の俳優は、どういう屈辱感とか、屈折をもって仕事をしてるのかわかるから、その人たちに対しては優しいかもしれな

いですね。

河合　私も職業柄、バレエとか見てても、すぐに周りの人のほうを見るんですよ。舞台でずっと立ってる人がいるでしょう。〈あれはどういう気持ちで主役を見てるんかな〉と思ったりね。

蜷川　先生に分析していただきたいんですけども、いい俳優というのはどうして、ああ問題児が多いんでしょうか（笑）。

河合　これはしょうがないですね。あんまり同調性とか、協調性というのがありすぎると、そんな傑出した演技できないですよね。その全体を演出するんだから、なかなかやと思いますけどね。

蜷川　僕としては忍耐力があるほうだと思ってるんですが、人はまあ、ないから物を投げると言うんですが（笑）。大変ですね、あの人たちを組織していくのは。

河合　それだけに楽しみも大きいですね。

蜷川　そうですね。でも、日本の俳優さんのほうが仕事はしやすくて、イギリス人と仕事をすると、なんでも論理的な根拠がなければ動かないんですね。

河合　それはものすごく感じます。日本人は「わかりました」って、わかってなくても言うんだけど、欧米の人は途方もないこと言いますよね。こっちも言い返そうと力が出る。それで僕は外国へ行くのが好きなんですよ。

蜷川　日本の中にいると、今おっしゃったように、「なぜ？」って聞かれることがほとんどないんです。若い人たちを教えてても、質問がなくて、「わかった？　何か質問ない？」って聞かなきゃいけないんですが、外国で若い人と仕事をしてると、「ハイハイ、蜷川、蜷川」、そればっかりなんです。自分を問い直すにはすごくいい場なんで。

それからイギリスって芝居が始まる前に、演出家と観客が討議をしたりするんです。終わった後もときどきありまして、観客の質問攻めにあうんです。演出家にとってはディスカッションはたいへんつらいんですが、いいこともあるなと思って、このごろは積極的にやるようにしてるんです。

河合　そういう意味では、海外へ行かれることは、すごく意味をもってますね。

生のものとの出会いを

河合　大学の学長もやっておられるでしょう。それはやっぱり若い者を育てようというお気持ちからですか。

蜷川　はい。週一回教えてはいたんですが、このごろの学生はモノローグはうまいんですが、対話が下手なんです。これはだめだと。学長にならないかと言われたときに、僕が教育についてできることは現場の演出家、現場の人間として語ることだ、そのことでいいんならやりますと言ってやってるんです。月一回、例えば安藤忠雄さんとか、篠田正浩さんといった方にも来ていただいて、みんなに話を聞いてもらうとか、そういうことも含めて、若者の再教育ですね。

河合　どうですか、学生の反応は。

蜷川　学生は元気がよくなってきてます。ただ、日常的にも「なぜそうやって、『○○だから』って語尾伸ばすんだよ」とか、「母音が甘すぎる」とか言って、それこそうるさいじじいと思われてるかもしれませんが。

自分の意見を言うとか、質問があったらどんどんしろとか、そういうことについてはかなりうるさく言ってるんです。オックスフォードでシェイクスピアをやっている学生たちのグループがありまして、毎年、日本へ来てるんで、うちの学生とも交流させようと思ってるんです。

河合　それはいいですね。はっきり違いもわかりますからね。若い人を指導する場合、ほかに気をつけておられることはありますか。

蜷川　具体的に肉体の接触について僕は激しく要求してるかもしれないんですが、つまり、触ったり、つかみ合うとか、髪の毛を引っ張るとか、身体と身体が触れ合うということについて。髪の毛をつかんで、引っ張られりゃ痛いから、こういうところが緊張する。緊張すれば体が硬くなるから、声が細くなってくる。どうも肉体接触の感覚が僕らの時代と違うので、そういう生々しい触れ合いについて、かなり意図的に教えてるということはあるかもしれません。

河合　それはおもしろいですね。昔に比べると、すごく少なくなってますよね。

蜷川　生のものと出会うということが少なくて、情報でもなんでも、インターネットがものすごく多いわけですね。

河合　ほんとにそうですね。昔だったら、家で大体はおやじになぐられたとか、兄貴になぐられたとかやってるでしょう。しかし、今の子だったら、ほとんどそういう経験がないかもしれませんね。

蜷川　そうですね。生徒にはともかく、世界中から来てるカンパニーでおもしろいものは、授業をサボってもいいから見に行けと言ってるんです。

河合　芝居でも、画像で見てるのと生を見るのと全然違いますよね。

蜷川　ですから、なるべく外へ出ていく。具体的に経験させると、演技の質が少しずつ変わってくるんです。若い俳優たちに対する教育も、直接的なコミュニケーションを増やすようにしていこうかなと。ことに演劇、あるいは音楽も含めた芸術的な学科については、そうしようと思ってるんです。

河合　それはすべてのことに通じてるかもわかりませんね。もっと生のものにみんなが触れるように我々も言いたいと思ってるんです。「芝居を見に行け」「コンサートを聴きに行け」ということをね。でも、蜷川さんのは『オイディプス王』のときも、『ペリクリーズ』のときもすごい人でしたね。

蜷川　さいたま芸術劇場のように、地方の公共の劇場がシェイクスピアのシリーズなんかをやってくれると、例えば『ペリクリーズ』のような有名じゃない戯曲でも上演できるわけですね。普通だと有名じゃないから、コマーシャルな劇場じゃできないんですけれども。そういう意味では、さいたま芸術劇場のシェイクスピア・シリーズはありがたいことだと思ってるんです。

河合　本当にすばらしいです。また、実際にあれだけの人がみんな東京から行ってると思うんです。それもいいことですよね。

芝居というのは、あれこそやり出したらやめられんでしょうな。

蜷川　おやりになりたいと思った時期は

文化人の本音 河合隼雄文化庁長官対談

ありますか。

河合　いや、僕は好きでね。僕は芸術的才能というのは、親もきょうだいもみんなあまりないんですけど、その中で、まあ何かできるいうたら、演劇とちがうかなと思うてるぐらいで。

蜷川　悲劇型ですか、喜劇型ですか。

河合　ぼくは喜劇型ですね。もの言わんでもええから、並んでるやつにいっぺん出してくれと言ってるんです。

蜷川　今度ぜひシェイクスピアの喜劇にでも出てください。

映画づくりのおもしろさ

河合　今度、映画もつくられたんですね。

蜷川　映画は二〇年前に撮ったんですけど、ちっともよくなくて、それ以来禁じてたんですが、ひさしぶりに撮ってみないかって言われまして。撮ってみたら、演劇と違って生き生きと世界を再現できる。例えば俳優が、涙がジワーッとわいてくるとこまで撮れるわけですね。そういうことが僕にはものすごくおもしろかったんです。

今また時代劇を撮り終えたばかりなんです。僕みたいな演劇人が映画を撮るということは申し訳ないなと思いながら、映画のもっている魔力といいますか、ロケーションへ行くことがほんとに楽しくて。

河合　それは劇場と違いますね。

蜷川　でも、ときどき失敗するわけです。そういうことも含めて、演劇と映画の違い、それから、僕を映画人だとは思ってない人たちに、自分が演出家として、すみません、撮り直してほしい、理由はこうだということを説明しなきゃいけないということも含めて、おもしろい体験をしています。

河合　映画のほうが、監督が自分でいろんなことをやるわけですから、演劇よりもはるかに自分の思いどおりに……。

蜷川　ただ、演劇は一か月かけて演技をやるんですが、映画はほとんどその場で、一日二五～二六カットは撮らなきゃ間に合わないんで。そうすると、演技者を育てる時間がないですね。ですから、俳優をきちんと育てていったり、スタッフも

育つためには、もうちょっと時間をかけて撮れるような状態じゃなきゃいけないかもしれないですね。

もう一つは、もっと若い人たちがたくさん撮れるようになるといいなと。僕のような年寄りで、よその業界のやつが来て撮るのは、〈悪いよなあ〉と思いながら。でも、やらせてもらってますけど。今、あれだけ映像に興味を示す若者たちがいますから、もっと自在に撮れるようになるといいなとは思ってます。

河合　今、学生のそういうコンクールなんかもありますけど。だいぶ若い人たちががんばってますからね。

蜷川　うちの娘もそうなんですが、インターネットで流す映画を撮ってるわけですね。それを見るとまるで違うんです。

僕より映像は才能があるかなと思うんです、若い世代のほうが。どうも映像世代というのは明らかにあって……。

河合　と思いますね。

蜷川　文字の世代とか、僕らみたいに演劇の世代とまた違うのがあるような気がします。

河合　だいぶ違うんじゃないかと思います。俳優さんだと、やっぱり映画よりは演劇のほうがおもしろいでしょうね。

蜷川　いや、それがですね、芝居には出たくないけれども、映画に出るという人が圧倒的に多いんです。くやしいんですけれども。今の若者たちはやっぱり映像世代なんじゃないかと思うんです。

河合　ああ、そうかもしれませんね。

蜷川　映画人口が減ったとはいいながら、みんな出たがりますね。芝居は一か所でしかやれないですけども、映画は同時に世界中で映るでしょう。

河合　僕らは芝居のほうがよっぽどおもしろいと思いますけどね。

蜷川　そうですね。でも、映画もおもしろくて、また続けて撮ろうかなと思ってるんです。

河合　日本の映画もがんばってもらわなきゃいけませんので。

蜷川　北野武さんもがんばってるんで。この年でがんばってもたかが知れてるかもしれませんが、まだもうちょっと先があるんだと思いたいんで。

河合　期待してます。本日はどうもありがとうございました。

（了）

文化庁の抜穴
河合隼雄

絶望の果て

「絶望は死に至る病」と言った哲学者がいた。確かに何の望みもないという状況は大変である。心理療法をしていると、「この世に何の望みもない」という人が来られ、答えに窮するときがある。しかし、それにはよい答えがあることを先日発見した。

「のぞみはもうありません」と面と向かって言われ、私は絶句した。ところが、その人が言った。

「のぞみはありませんが、光はあります」

なんとすばらしい言葉だと私は感激した。このように言ってくださったのは、もちろん、新幹線の切符売場の駅員さんである。

「のぞみはなくとも、ひかりがある」

あまりにもいい言葉なので、私は思わず、言われたとおりのことを大声で繰り返して言ってしまった。

駅員さんは不思議そうな顔をしていたが、

「あっ、『こだま』が帰ってきた」

と言った。ハイ、オシマイ。

●12月号予告

◆長官対談◆
【文化人の本音】河合隼雄文化庁長官対談
加藤　剛　俳優
【長官コラム文化庁の抜穴】

◆特集◆

日本文化の国際発信

【提言】
日本文化の国際発信
【インタビュー】
文化庁文化交流使
【事例紹介】
国際アニメ・マンガフォーラム
松竹大歌舞伎近松座公演
日本におけるトルコ年

◆連載◆
【わがまちの文化振興条例】
鳥取県
【いきいきミュージアム～美術館・博物館事業レポート～】
中山道広重美術館（岐阜県）
【著作権の保護とその例外】
【子どもたちから見た伝統的建造物群保存地区】
五個荘町金堂（滋賀県）
【全国発掘調査ホット情報】
千坊山遺跡（富山県）
【文化体験プログラム支援事業】
ながす文化体験プログラム事業（熊本県長洲町）
【外来語の現状とその解決のために】
……甲斐睦朗国立国語研究所所長
【探訪　日本の世界遺産】
厳島神社（広島県）
【国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法】
仏画の見方
【日本の伝統美と技を守る人々】
木工品修理・桜井　洋
【文化ボランティア通信】

◆文化庁ニュース◆
国立劇場おきなわの開場について
平成一五年度文化庁長官表彰表彰者決定　ほか

編集後記

今月号の特集では、「文化的景観の保護」をお届けいたしました。「文化的景観」という言葉は皆様にはなじみの薄い用語だと思いますが、本文中の棚田や里山等の事例でなんとなくイメージしていただけたのではないでしょうか。人と自然が長い年月をかけ、共同してつくり上げてきた文化的景観。それを保全・保護していこうという取組は、世界遺産の事例でわかるように今や世界的な潮流となっています。文化庁としても文化的景観の保護施策について現在検討しているところです。

文化財は、国民の皆様の理解と協力なしに後世に守り伝えていくことはできません。さらには、一度失うと二度と取り戻すことのできない日本の貴重な財産でもあります。従来の文化財にない面的な広がりをもつ文化的景観は、地域住民のみならず、NPO、地方公共団体、国等が相互に協力し合って初めてその保護が図られるものです。本特集が皆様の文化的景観に対するご理解を深めていただける一助になれば幸いです。

（T・K）

文化庁では、ホームページで、文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見、文化庁月報の感想などを、ホームページのご意見欄へお寄せください。

●ホームページアドレス●
http://www.bunka.go.jp

文化庁月報 11月号（通巻422）

平成15年11月25日印刷・発行

編集――文化庁
〒100-8959　東京都千代田区霞が関3-2-2
発行――株式会社 ぎょうせい
本社　〒104-0061　東京都中央区銀座7-4-12
本部　〒167-8088　東京都杉並区荻窪4-30-16
電話　編集　03（3571）2126
販売　03（5349）6666
URL：http://www.gyosei.co.jp
印刷所―ぎょうせいデジタル株式会社

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円　本体514円　送料76円
年間購読料6,480円
本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先
（株）ぎょうせい営業部広告課
電話03（5349）6657（ダイヤルイン）

©2003 Printed in Japan

ISSN 0916-9849

本誌は本文用紙に再生紙を使用しております。